

香港二大テーマパーク

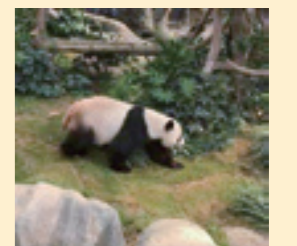
1年を通して世界中から多くの旅行者が訪れる香港。クリスマスから年末年始、旧正月にかけて来港者数は毎年ピークを迎える。旅行者だけでなく地元市民にも人気の高い二大テーマパークが「香港ディズニーランド」と「オーシャンパーク」である。

世界に6つあるディズニーランドの中で、香港が一番規模が小さい。そのため、パレードが見やすく、ミッキーやミニなど人気キャラクターの写真が撮影しやすいなどファンにとっては穴場のディズニーランドとも言われる。一方、オーシャンパークは「オーシャン」と付だけあって水族館はもちろん、イルカの飼育施設、目の前まで近づいてくるパンダや10分以上乗る長いゴンドラなど数多くのアトラクションがあるため1日中飽きずに過ごすことができる。しかし、最近では中国本土客の減少や経費高騰の影響により経営不振が続いており、香港ディズニーランドは2015年9月決算で4年ぶりの赤字転落、オーシャンパークも2016年6月決算で赤字となってしまった。

香港政府は観光資源を経済の活性化につなげたいと、二大テーマパークは施設の増設、拡張を発表。ディズニーランドでは、アメリカの人気ヒーローのアトラクション「アイアンマン・エクスペリエンス (Iron Man Experience)」を年始に稼働させ、今後は日本でも大人気となった「アナと雪の女王」をテーマとする新エリアを設けるほか、既存エリアの改装も予定されている。オーシャンパークはこれまでアクセスの不便さが課題だったが、昨年末に同パークへ直通する地下鉄が開通したことにより、夜間営業を始める予定だ。さらに屋外飲食エリアを拡充して同施設に付随する初のホテルの開業、全天候型プールアトラクションなども建設される計画がある。

今後一層注目される二大テーマパークを訪れ、香港の新たな魅力を発見してはいかがだろうか。

「しがさんアジア月報」2月号より
香港支店 宮内 康誠



パンダが間近で見られる人気のオーシャンパーク



キリ村で栽培されている「パタフライ・ピー」。ハーブティーの原料となる

者確保が難しい。加えて農家は自給型が中心で、近代的な農業の知識が少ない。二つ目はインフラの未整備だ。主要道路は舗装されているが、保守状況が悪くところどころで陥没している。また、農村地域では人を輸送するために農業用トラクターが一般道を走行しており、おのずと低速走行になってしまう。一方、電力は水力発電により安く安定供給され、水も地下水が豊富だが、それらの供給網が農地まで伸びておらず自社で整備をしなければならない。TCCグループのように資本力がなければ容易には進出できない環境である。

また、親会社のツジコー株式会社では、ラオスに多く存在する固有植物を、同社の加工技術を活用して健康食品原料にすることを目指し、実証事業を行っている。この事業は、国際協力機構(JICA)の「中小企業海外展開支援事業」の案件化調査と普及・実証事業の採択を受け、ODA(政府開発援助)を活用している。中小企業の途上国でのビジネス展開はインフラや法の未整備などにより企業負担も大きく、公的機関の支援も必要だ。同社は将来的にはラオスで栽培・加工された健康食品の販売も展望している。

いずれの取り組みも「宝石(ラオスの人々と土地)」に着目し、現地との共生を優先した展開だからこそ、問題点を克服し新たな事業として確立できた。ツジコー、日本アドバンスアグリを務める辻昭久社長が、委託農家の人々と植物の成長を共に喜んでいる姿こそ、ラオスでのアグリビジネスのポイントだと実感する。



ツジコー(株)・日本アドバンスアグリ(株)の社長とキリ村の農家の人々

タイでビール等の製造・販売を手掛ける大手財閥TCCグループは、09年からこの地でコーヒーの栽培を開始した。栽培面積は2,400ha。収穫されるコーヒーの70%は日本に輸出されている。ボラベン高原で栽培されるコーヒー豆の多くは「アラビカ種」だ。この種は、標高1,000m以上の高地でしか栽培できず、気温の変化や日照りに弱く栽培が難しい。近年、東南アジアではコーヒー生産が盛んだが、生産量世界2位のベトナムや4位のインドネシアは、栽培が比較的容易な「ロブスタ種」が主である。「アラビカ種」は風味が豊かで、「ロブスタ種」の2倍程度の価格で取り引きされる。ボラベン高原で栽培されるコーヒーは、ラオスの輸出農産物の約半分を占めるまでとなった。外国企業の参入が同国のアグリビジネスを成長させた好事例だ。

「宝石」との共生

植物原料を利用した食品事業を展開する日本アドバンスアグリ株式会社(滋賀県長浜市。親会社ツジコー株式会社)は、有機農業に適したラオスに早くから着目し、農業・化学肥料不使用のラオス産原料を100%使用したハーブティーを生産販売している。原料はラオス南部パクセー近郊にあるキリ村で栽培を委託している。同社はこれまで自給型農業を行ってきたキリ村の農家に対し、栽培品目の選定から、その栽培方法まで細かく指導、キリ村の人々はハーブティーの原料を栽培することで市場型農業に転換することができた。農業で安定収入が得られれば、都市部や周辺諸国への人口流出が少なくなる。今後、同社では栽培品目を増やし、ラオ

「メコンの宝石」ラオス

text by 滋賀銀行 前バンコク駐在員事務所長 河村 正弘

Asia & World
ラオス情報

これまで自給自足の自然農業が中心で農薬の使用頻度が少なかったラオス。農薬の残留程度が極めて低く、有機農法に適した肥沃な土地が注目されている。高付加価値農業国を目指すラオスにおけるアグリビジネスの現状をレポートする。

「メコンの宝石」ラオスの魅力

「LAOS, Jewel of Mekong(ラオス、メコンの宝石)」、ラオス観光庁が観光促進のために定めたラオスのキャッチフレーズだ。2007年には、ニューヨークタイムズの読者投票で、ラオスは「次に訪れたい国」の第1位に選ばれた。また古都ルアンパバーンは15年、英国の旅行雑誌で世界遺産人気投票で第1位になった。同年にラオスを訪れた外国人観光客数は460万人で10年前の約4倍。観光収入は鉱物輸出に次いで多く、貴重な外貨収入源だ。雄大なメコン川を眺めながら、「素朴で穏やかなラオスの人々=宝石」と接する時間は旅行者に安らぎを与える。

ラオスは5カ国(中国、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマー)と国境を接し、ASEANで唯一、海に面していない内陸国である。人口が約650万人の小さな国だ

が、国土面積は23万6,800km²で日本の本州に相当する。温暖で適度な雨量に恵まれた気候環境のため、人口の約70%が農業に従事している。米を主とした自給型農業が中心で、農業利用者が17%と少ない肥沃な土地もまた「宝石」である。

ボラベン高原で栽培される「コーヒー」

ラオス南部のボラベン高原は面積が5,800km²、標高約1,200mの台地で、1年中冷涼な気候だ。加えて年間降水量が3,500mmを超えるため、ラオスでも特に農業生産地に適している。南部の中核都市であるパクセーまで50kmとアクセスがよい。パクセーは、交通の要地として陸路・航路ともに整備され、商業が発展している都市だ。この恵まれた環境から、ボラベン高原ではコーヒーや高原野菜などの輸出を目的とした商品作物の生産地として外国企業の進出が進んでいる。

タイでビール等の製造・販売を手掛ける大手財閥TCCグループは、09年からこの地でコーヒーの栽培を開始した。栽培面積は2,400ha。収穫されるコーヒーの70%は日本に輸出されている。ボラベン高原で栽培されるコーヒー豆の多くは「アラビカ種」だ。この種は、標高1,000m以上の高地でしか栽培できず、気温の変化や日照りに弱く栽培が難しい。近年、東南アジアではコーヒー生産が盛んだが、生産量世界2位のベトナムや4位のインドネシアは、栽培が比較的容易な「ロブスタ種」が主である。「アラビカ種」は風味が豊かで、「ロブスタ種」の2倍程度の価格で取り引きされる。ボラベン高原で栽培されるコーヒーは、ラオスの輸出農産物の約半分を占めるまでとなった。外国企業の参入が同国のアグリビジネスを成長させた好事例だ。

農業分野の投資環境

ラオス政府は、輸出のための農業を投資奨励業種として、最大10年間の法人税、関税・付加価値税の免除などのインセンティブを付与している。特に付加価値の高い農業生産を目指し、有機農業などを奨励している。

しかし、企業が進出するにあたって問題点も多い。一つは労働力不足である。ラオスは人口650万人と少なく、安定的な労働



ラオス農村地域の道路。舗装されているが保守状況は不十分だ

前月号 本コーナーの掲載に誤りがありましたので、お詫びして訂正します。

P13グラフ「一人当たりの名目GDP(GDP÷人口)の推移(香港と日本の比較)」の凡例。(誤)中国 →(正)香港